

<原著>

古代の危機—ローマ帝国衰退に関するオルテガの見解—

長谷川 高生

Historical Crisis in the Ancient Times
— Ortega's View on Decline of Roman Empire —

Kosei HASEGAWA

*In this paper, I try to study Ortega's view on Decline of the ancient Roman Empire. History of the Romans has Roman myths, Imperial rule, Republican Government and Imperial Government from the birth in B.C.8 to the death in A.D.5. Ortega offers five causes of the collapse of this Empire, that is to say, economic depression, political disintegration, extinction of social concord, loss of freedom and pseudo-legitimacies. This historical crisis had continued over a long period from B.C.1 to A.D.4. The whole span of this Empire experienced lapse of slavery, separation between Italy and provinces, radical discord as to who shall rule, change from life as freedom to life as adaptation and illegitimacy of rule, etc. With invasion of the Germanic peoples, Roman Empire went to ruin, and the Christianity growing within this Empire opened the way to medieval European society.

Key words : lapse of slavery, political disintegration, extinction of concord, loss of freedom, illegitimacy
奴隷制の消滅、政治的不統合、和合の消失、自由の喪失、非正統性

I はじめに

世界の歴史において、ローマ帝国は特異な位置を占めている。オルテガによれば、「ローマ帝国は、国家という有機体が描く完全な軌跡について」、「その誕生と消滅に立ち会うことができる」「われわれが知っている唯一の例」なのであり、ローマ民族は「その歴史がわれわれに知られている数多くの民族の中であって」、「われわれが見守る前でその生の周期全体を展開してみせてくれる唯一の民族」なのである¹⁾。実際、古代ローマは紀元前753年のローマ誕生から王政、共和政、帝政、

西暦476年の西ローマ帝国滅亡と1200年以上に亘って歴史的に展開していくのであり、1453年の東ローマ帝国滅亡までも視野に入れば優に2200年以上、世界史上にその存在を誇示してきたのである。本稿の目的である西ローマ帝国崩壊に考察を絞ってみれば、永遠にその栄華を継続すると思われたこのローマ帝国が5～6世紀かけて徐々に衰退していくのであるが、そこには様々な要因がからまっていたはずである。オルテガによれば、紀元前1世紀以降のローマ帝国は現代と同じく、人々が自分の人生が最終的にそれに依拠すべき、生の究極の拠所を喪失した大衆社会状況

にあったのである。ユダヤ人やローマの政治家キケロなどもこうした大衆社会状況の中で人生の意味を見出せず、それゆえに救済される根拠も失い、同一の絶望の生に生きていたのである。彼らは人生の意味を自らの内面に求めず、道徳や規範遵守においても、もっぱら生の外面的な対象に基準を設け、徹底的に自己疎外に生きたのであった。こうした過激な自己疎外の大衆社会状況から、これまた徹底して自己沈潜に生きる過激主義の宗教が現れて来るのである。これがキリスト教であった。人間はあまりに過激に外向きに生きた場合、そうした生とは反対の過激に内面に向かう内向きの自己沈潜の生を指向するようになる。かくして一面享樂的であった紀元前1世紀以後のローマ帝国の大衆社会に生きた人間が、反転して自己沈潜し中世ヨーロッパのキリスト教社会を形成していくのである。ではこうしたローマ帝国にも似た、現代の大衆社会状況に生きる人間はどういう方向を選択するのであるか。現代人は今後も同じような大衆社会を自己疎外的に生き抜くのか、それとも自己沈潜の方向を選択するのか、あるいはこれらとは別の進路を目指すのか。どの方向を選択するにせよ、それはその人間の自由であるが、彼が選んだ生は自分の責任であり、それが彼の生そのものであったということである。以下、オルテガの見解を参考にしつつ大衆社会状況下のローマ帝国滅亡の諸原因を探究してみよう。

II ローマ帝国衰退の原因

世界史上に未曾有の長大・強大な文明・文化を誇ったローマ帝国は、いかなる原因・理由によって衰退していったのか。これまでの研究者が提出したこの帝国衰退の原因は200種以上で、多岐にわたる²⁾。これらの多様な

衰退原因を一つ一つ検討することは、本論の企図するところではない³⁾。しかし因みに一例を挙げれば、ローマ帝国の研究者本村凌二氏の最近の見解によれば、西ローマ帝国の滅亡は「国力の低下」によるものであり、その要因として①異民族の侵入、②インフラの老朽化、③ローマ帝国の中心たるイタリアの凋落を挙げ、その滅亡は「偉大な老人の死」のごとく「ごく自然な形で“老衰”」であり、その後3～8世紀にかけて西にキリスト教、東にイスラム教という新しい文化の誕生を促したのである⁴⁾。また大著『ローマ帝国衰亡史』を著したギボンによって提出されたローマ帝国衰亡の原因は、「野蛮と宗教の勝利」、すなわちゲルマン民族の侵入とキリスト教の普及であった⁵⁾。ギボンのこの有名な著作については何冊も注釈書が公刊されているほどなので、彼の見解については少し詳しく紹介しておこう。

ギボンはその著作の第38章「西ローマ帝国衰亡の総括」において、以下のように述べている。「ローマの衰頹は、その法外な肥大さのもたらした自然で不可避な結果であった。繁栄が腐敗の原理をはびこらせ、破滅の諸原因は征服範囲の広がりによって倍加して行った。時の経過と偶発事の続出とが人工的な土台を取除いてしまうや否や、その途方もなく膨らんだ機構は自らの重みに抗しかねた。その滅亡の顛末は簡単明瞭である。何故にローマ帝国が潰滅したかを探るよりも、われらはこの国があれだけ長命を保ったことにむしろ驚くべきである。勝ち誇ったローマの各軍団は、遠隔地の戦いで異邦人や傭兵たちの悪徳を身につけ、まず共和国以来の自由を圧迫した後、紫衣の権威を冒すことになった。歴代の皇帝は彼ら自身の安穩と国全体の平和を熱望する余り、兵士らを敵にとっても君主自身にとっても等しく恐るべきものとしたあの規

律を腐敗させるといふ、見下げ果てた一時凌ぎの手段に追い込まれた。軍事政権の力強さは、コンスタンティヌス帝の偏頗な諸制度によって緩められ、揚句の果ては解体された。こうしてローマ世界は、洪水の如く来襲した蛮族に圧倒されたのだ⁶⁾。さらにギボンが、「キリスト教公認」を「没落の原因」とみたボルテールと同様に⁷⁾、ローマ没落にキリスト教の影響を認め以下のように述べ、文明の進歩と理性への信仰を表明している。「来世での幸福ということが宗教の重要な目的である以上、キリスト教の導入が、少なくともその蔓延が、ローマ帝国の衰亡に多少の影響を与えたと聞いても、われらは驚いたり呆れたりするには及ぶまい。聖職者たちは忍耐と臆病礼讃の教義を説いて効をあげた。「宗教の教えは、信者たちの持って生まれた性向を甘やかして認める場合は守られ易いものであるが、キリスト教の純粹で真正な影響力は、北方蛮族の新改宗者に対する不十分ながらも有益だった効果の中に跡づけることができよう。ローマ帝国の衰退がコンスタンティヌス大帝の改宗によってその速度が早められたとしても、勝ち誇った彼の新しい宗教が帝国滅亡の烈しさを緩和し、征服者たちの獐猛さを和らげたことは事実である」⁸⁾。

こうしたギボンの、ローマ帝国衰亡についての「自然主義的」な見解、具体的には軍事的・宗教的原因の見解に関しては、古代史研究者ウォールバンクは「この見方の正しさ」を承認し、「ローマ帝国は、気候の変化とか、土壌の性質とか、住民の健康とか、また没落の実際の過程であるように重要な役割を果たした社会的、政治的要因のような、個々の理由で衰頹したのではなかった。むしろ帝国が或る点においては、自己に加えられる圧迫に対して抵抗する力を持たず—古代社会の全体的構造がこのような抵抗を不可能にした—、そ

れに屈したから衰頹したのである」と言っている⁹⁾。そして彼自身は古代経済の社会経済的構造に着目して、「ローマ帝国衰亡の最大の原因」は「古典古代の文明を成立させた前提そのもの」、すなわち「完全に低水準にある技術、そしてそれを補うものとしての奴隷制」という「諸現象」と「そこから生じた精神的環境」の中に求められなければならないと言明している¹⁰⁾。

スペインの哲学者オルテガもローマ帝国の滅亡について注目すべき重要な見解を提示している。ただしオルテガがローマ帝国滅亡に帰結する「古代の危機」と呼ぶ現象は、ローマ世界全体を包含した長期にわたる。オルテガの研究者色摩力夫氏も言及しているように、「古代の危機の始期については、実は、あまりはっきりしない。ただ、明らかなことは、危機は紀元前一世紀に既に頂点に達し、紀元後四世紀に、ローマ帝国でキリスト教信仰が確立するまで、続いたということである」¹¹⁾。つまり、紀元前1世紀を危機の頂点として、危機が紀元後4世紀まで継続したということである。すなわち、以下で述べる1) 経済的原因、2) 政治的原因、3) 和合の消失、4) 自由の喪失、5) 正統性の消滅など、ローマ帝国滅亡の諸現象が紀元前1世紀から西暦4~5世紀の間続いていたということである。以下、それらについて検討・考察してみよう。

(1) 経済的原因

まずオルテガは論文「ローマの死滅について」において社会学の泰斗 M. ウェーバーの見解を紹介している。彼はローマ滅亡について、ウェーバーの名著『古代文化没落の社会的諸原因』で明瞭に展開された「経済的原因」を検討している。ウェーバーによれば当初、「ローマは戦士なる農夫の国」であった。「最初の頃富裕な地主達は、相共に都雅なる

くらしをするために」都市に赴く。彼らが「氏族」や「元老院」を形成する。「田舎の連中が都市へと赴」き、「古典的な都市の常に基となる『集住』乃至は集会」を形づくり、「都市の形」を徐々に創るのである。この流れに対して「逆流」が発生する。それは、ローマの「支配と戦闘の天才的なその資質」が「征服地」という「とびきりな結実」をもたらすと同時に、それを耕す「奴隷」、つまり「もの言う道具」を必要とする時に出現する。「奴隷をつかう資本家」は「龐大な大土地所有」によってローマ世界をくみたてるが、他方これは「最初の征服者でもあった小地主の漸進的な消滅」をも引き起こす。かくして「新たな経済構造」は「古代の実生活の完全なる地汙り」をもたらす。「商業」は海沿いで「都市と都市の間の絆として、紐帯として」営まれ、「新しい農業」は「『後背地』へと社会の重心を移してゆく」のである。この農業の「土地には取引もなければ、取引を行う手段もない」。かくして「小地主は、大土地所領と張り合うことの出来ぬまま、自分ひとりで己があらゆる需要をみたしはじめ」、「己が土地の一画に隔絶する」。「富裕な市民は自身の職人をまかなっている」ゆえ、「もはや都市においてものを買うこと」もない。すなわち、「都市は再び田舎に吸収される」のである。「大地主は、古くからのローマの名門を除いて、その『荘園』に、その大土地所領に閉じこもり、「所領で権威を行使して、結局は領主となっておわる」のである。このようにして、ローマの「帝国は原子化し、殆んど文字通り粉々になってしまう」のである¹²⁾。

またローマ帝国の「途方のない征服事業」は「龐大な軍隊」を必要とし、それゆえまた「まことに莫大な現金の量」を必要とした。それゆえ「国家」は「貨幣による商業の最後の名残がなお保たれている唯一の場所なる都

市を締めつけ」、その結果「都市における生活は不可能」になる。つまり「都市共同体の財政的負担を負う義務」のある「金持」は、「その資産を以て国庫に対する都市共同体の分担金に責任」を負わねばならないので、「田舎への逃避」を遂行する。他方「経済的な離れ小島の数々」として成立している「田舎」は、「その各々一つ一つがそれ自身で自足しているものだから、またぞろ現物取引」に戻ってしまう。こうした時節、「戦争はその最大の膨張にまで」達すると、「奴隷狩りは終りを告げ」る。「人なる道具は少なくなり、値上がりする」のである。かくして「古代の経済は、われとわれみずからを締め殺す」のである。この「働き手の不足」は「労働者や奴隷の季節移動」の不許可を促し、彼らを「土地に緊縛」する。

「蛮族がローマという龐大な機構の北辺を疲弊させる」時期と時を同じくして、「国家」は「田舎から兵士をかり集めることを諦め」、「蛮族に守備隊の兵員をもとめ」、「軍隊は純然たる傭兵となり」、「ローマ化されること最も少ない帝国辺境の諸種族」が席卷することになる。「ゲルマン人は土地を請い、帝国は、彼らをして国境の大河を渡らせ、帝国の機構そのものの中に嵌め込んで、防衛の任に当たさせた」のである。かくして「戦争予算も増大する一方で、世上に現金はいよいよ少なくなる。それゆえ、「その最後の数世紀における帝国の全政策が貨幣を探しもとめることなのである」、とウェーバーは指摘しているのである。オルテガもまたローマのこの「最後の決め」において、「これこれしかじかの侵入はなかった」、「帝国がむしろ軍事的に一息つけるようにと断行した同化吸収だった」、「帝国の防衛者は、不可避的に、帝国の主人公となっておわった」と言明しているのである。

以上の「ローマの死滅に関するウェーバーの学説」についてオルテガは、「ローマの経済は奴隷制を呼吸している。奴隷が欠落するとき、帝国という魚は窒息して死んでしまう」と要約している。そしてウェーバーが「ローマの没落を何もその諸要因のそっくり全体において分析しようと目論んでいるのではない」、むしろ「歴史的現実の裡にひそむ『諸原因』の驚くべき交錯を見出す」ことを企図している、と指摘している¹³⁾。

(2) 政治的原因

さて、オルテガは以上のごとく「ウェーバーに拠るローマ没落の経済的観点」を検討したあと、「政治的見地からそれを眺める」のである¹⁴⁾。彼によれば、「地中海が意のままに実らせる政治的結実」は「都市国家」、すなわち、「市域から見渡せるぐるりの狭い帯状の平野を伴った都市であるポリス」であった。「都市」とは何よりも先ず、「小広場、中央広場、広場」なのであり、「談論、議論、弁論、政治のための場所」であった。厳密には、「古典古代の都市は、家屋があつてはならなかった」のであり、むしろ「政治的動物が農業的空間の上に境界標を設けてできた人為的な舞台なる広場を鎖すのに必要なただ正面がありさえすればそれでよかつた」のである¹⁵⁾。

そこで、「貴族的であるとはいえ、一つの民主政である」「ローマ人の国家」では、「民衆—『人民（ポプルス）』—が定期的な選挙を通じて国家の命運を左右する」ゆえ、「民主政の理想」を実現すべく、「田舎者が身みずから投票をしに都市へとやって来る」。ところが、「ここにローマがラティウム地方を征服」し、「程へずして、ラティウム人の連帯を確保するため、彼らに市民権を授与する」のである。オルテガの見るところ、「既にここにおいてわれわれはローマの政治形式とそ

の下にある社会的現実には最初の齟齬があらわれてくる」のである。つまり、ラティウム地方という遠方からの「不在意志にとって代る一定数の専門的選挙人が選任されるようになる」のである。「このような都市の中に形成されて来た多数の平民（プレーベース）こそは、実質的な有権者となって行くもの」であつて、「この連中を不穏分子、野心家、反抗児などが操ろうとする」わけである。

そしてさらに、「ローマが全イタリアを征服することが持ち上」り、「イタリア諸族は一ひと頃のラティウム人同様—先ず最初は同盟者という見かけの下にたちあらわれる」。しかし、このことは「彼らがあらゆる賦課を忍んで、しかも殆んど何らの権利ももっていないこと」を意味する。この時ローマ史に登壇してくるのが、グラッスス兄弟である。オルテガによれば、彼らは「十九世紀の革命家よろしく雑然たる頭脳の持主」であり、「茫漠とした心、感傷的で、嘗て書物でお目にかかつた英雄的なしぐさに芝居がかつて引きつけられてゆくといった魂の持主」で、「イタリア諸族に市民権を約束し、貧民をして富裕民に対する巻き返しを行なわせ（農地法）、また有産階級（ブルジョワジー）（騎士階級（エクイテース））を貴族（元老院身分（セナトリアーレース））に対し気まずくさせる」。すなわち、「グラックス兄弟は潜在的なあらゆる葛藤の嵐を突如として解き放ち、ローマは決して平静に立ち戻ることがなくなる」のである。そうした結果が、「同盟諸市の叛乱とひきつづく苦しい戦争〔同盟市戦争〕」だったのである¹⁶⁾。

この後、「ローマは快くイタリア諸族に完全市民権を授け」る。しかし、「この市民権」は「虚妄」なのである。「巨大な全体」としての「イタリア」は「はや出来上っている」のだが、「こんな遠くにいる選挙人共」がロー

マの「ティベリス〔テーヴェレ〕河の畔なる小広場」「くんだりまで投票にくり出すことは不可能なのである。ローマ人は、「ヨーロッパの諸国に現にあったあんなにも単純な、われわれにとってはあんなにも自明の観念、すなわち代議政の観念」を考えつきもしないという「心の限界」を有していたのである。すなわちローマ人は、「社会の遠く離れた不在の部分が、ただその代理人を選び出すというだけで、暗黙に立ち会うことが出来る」という観念的な「単純な抽象」にも「無能だった」のであり、こうした「選挙技術」の単なる欠陥がローマ帝国という「かくも壮大なる社会機構の崩壊」を招いた、とオルテガは指摘するのである¹⁷⁾。

ローマ人にとっては「代理者ではなく、投票者がその場に臨んでいるようにという要求は、決定的なだけに」、「それだけまた不幸な効果をローマに生み出した」。すなわち、「最も重大なのは、属州とローマとの乖離」である。この関係においては、「ローマの住民」は「とどのつまり、唯一の有効な投票者」であり、従って、「かの途方もない大帝国の政治的に活躍している唯一の部分」であり、「社会全体の爾余の部分は何もの数にも入っていない」。このことは「ローマにおける政治主義のべら棒な凝縮、正直に言って神経症的（ノイローゼ）で形式主義的で内容空疎の活動過剰」を伴うことになる。反対に、「属州」は「帝国の運命にも、またいよいよ以て中央の権力に吸収されゆく己が運命にも参画しないことに慣れっこ」になってしまい、「沈滞、道義の頹廢、無気力が増大」し、「属州の領域を広汎な連帯の中に結び合わせるがごとき運動は、何一つ湧き出して来ようもない」。むしろ逆に、「属州」は「経済的に原子（アトム）化」したように、「政治的にも原子（アトム）化」するのである。「属州の中に帝国

にとっての新たな指導力が用意されるのを期待するのは、無益」であり、属州民は「活躍することも叶わぬまま」、「あらゆる公的な訓練の機を喪失し、訓練された人々についてしか可能でない精力的な淘汰もないまま、日に日に頹廢してゆく」のである¹⁸⁾。

そうこうするうちに「ローマの政治は、次第と選挙技術の独占的な獲物となり行き、徒党の領袖の軍門に降らざるをえなくなる」。「これらの徒党は、やがて干戈を弄ぶにいたる」のである。「紀元前七〇年の頃」、「兵員会（コミティア）に干渉するのがもはやローマ人」でなく、むしろ「フリギア〔小アジアの中央部〕人やミュシア〔小アジアの西北端の地方〕人、ギリシア人やユダヤ人、奴隷や剣闘士（グラダイアトル）」になってしまっていることからわかるように、「ローマではいくつかの傍若無人の党派」が「支配している」のである。「政治的頹廢のこうした過程を履むうちに、直接行動へと辿り着」き、最後には「軍団（レギオー）がお手盛りで排他的な選挙の実施を遂にものにし、皇帝を指名したりするようになる¹⁹⁾」。

軍団によるローマの政治支配という、「ローマ史のまた別の相貌に属している」政治的現象は「紀元前一世紀」というローマ史の「決定的刹那」に現出してきたことなのだが、「元来はただ一つのものであって、もともと『武装国民』を意味する語（ことば）である『人民（ポブルス）』を形成していた全投票者団と全戦士団の間にできた、今一つの大きく且つ漸増しゆく乖離」を意味している。オルテガの見るところ、「ローマ人の心の限界と強情ぶり」に「支配された社会的有機体は、既にばかどかい規模を獲得してしまっていたから、もはや政治的にローマによっては生きることが出来なかった」のであり、「別の新たな社会的潜在能力」は「属州でしかありえな

かった」のである²⁰⁾。それを見通していた人物が、ユーリウス・カエサルであった。

「共和国は既にして単に言葉でしかない」と言っていたのけた「カエサルの天才」の構想は、『共和国』の観念、言い換えれば元老院（セナトウス）、護民官、本人出席の兵員会（コミティア）といった観念の裡に宿命的に刻み込まれていた古きローマ貴族の腐れはてた頭」に比較しては、「余りにも絶妙な観念、余りにも複雑且つ広汎な観念」だったのである。古代に生きた「爾余の魂」は「誰一人として再びカエサルの観念を『看得』」できず、「誰よりも不熱心なのが何と彼の後継ぎ、慎重なアウグストゥス帝」で、彼が「臆（やが）てローマ人の魂の限界内にどっかと胡坐（あぐら）をかいてしまう」のである²¹⁾。

（3）和合の消失

オルテガはローマ帝国の滅亡原因について、以上の経済的原因や政治的原因のほかにも当時のローマ社会に内在した原理・原則の消失を挙げているように思われる。すなわち、「和合と自由の消滅」である。

オルテガは論文「ローマ帝国をめぐって」において、『和合』・自由という一霞のようで、それでいてもっとも手ごたえのある二つのことながら雲散霧消してしまっていた」から、「ローマ帝国と呼ばれる生の形式がひょこりと現われた」と言明している。紀元前1世紀のローマの政治家キケロがその国家論のなかで、この「和合」と自由の実現や消失によって「自分の周囲で実生活がとる相貌を前にしての己が魂の根本的な不快の念を表明した」ことに関して、オルテガは「かかる相貌は、西欧の生活がここ三二十年来だんだんと身につけてきた相貌と、その本質的な特徴のいくつかにおいて、ぴったりと一致」していることを指摘し、「和合」と「自由」という「キ

ケローにとりこの二つの言葉が有した本当の意味」を探求していくのである²²⁾。

オルテガがキケロに事寄せて考察するところ、「内訌が産み出される」のは「社会の成員が反目しあうがゆえ、つまりは、公共の諸問題につき意見の齟齬を来す」からだが、「この確執は同時に政治的なあらゆる完成・発展の前提」であり、「社会が或る一定の究極的な意見において成員の合意し一致しているおかげで存立することも明らか」である。「考え方におけるこの合意、乃至は満場一致」こそが「キケローのいわゆる『和合』」であって、それを申し分なく概念化するならば「国家全体の最上にして、もっともしっかりとした絆（きずな）」と定義される²³⁾。

オルテガはキケロの文章から二つの違和（内訌）を読み取っている。すなわち、「根本的というわけでない違和」の場合は、「市民」は「反対派と闘っているその間も反対派の中に不倶戴天の敵を認めていない」し、「敵意を抱くその下で、相変わらず互いに友だと感じあっている」。「好意ある向士の争いは、かたき向士の闘いにあらず」という訳である。「相争う両者の上には、両者がしばしば憩えうる或る共通の環境が十分有効に存続している」。それは「世界や人生についての信条であり、道徳的規範、法原理であり、戦争の形式さえも規制する掟」である。かれらは「闘争している間、自分の周りに国家が依然存在しつづけていることを見てとっている」。「そこに惹起する諸々の闘争は、諸階層に生きながらえているもっとも奥底の和合という大地の上で動いているものである」。「皮相の不一致は共生の基盤への回想を確乎にし強固にするものでしかない」のである²⁴⁾。

しかし、「根本的」な「違和」のある場合は、「こういうすべては根絶やしになる」。「相争う同士、その間に何一つ共通のものがない。

国家は破壊されてしまっていて、それとともに、それを支える観念、規範、構造のあらゆる有効性も破壊せられる」。これこそは「『和合』がないと気づいた際の文字通りキケローの気持ちであった²⁵⁾。「社会全体はばらばらに分裂する」ということは、「離れ離れの心と心(コラソーネス)」あるいは「二つに引き裂かれた心(コラソン)」、すなわち、「和合〔心合わせ〕(コンコルディア)の反対語としての不和〔心離れ〕(デイスコルディア)」を象徴している。「蓋し社会はそうなる」と、「和合することを金輪際やめてしまう」。つまり、「解体し、二つの社会に割れる」、つまりは、「根本的なその違和が、それを生じたその社会のただもう絶滅を産み出すだけ」なのである。そうして正しく後者のこの「根本的」な「不和」こそが、「キケローがその周囲から感じとったところ」であった。それは「これまでの闘争よりも恐らくはもっと激烈な闘争」というようなものでもなく、「このローマ社会のむしろ全面的な破壊」であったのである²⁶⁾。

そしてこの「不和」が「純粹にして根本的」なものになるのは、「問題が国家生活で究極且つ根本的なものであるとき」である。すなわち、オルテガによれば、「誰が命ずべきかについての合意これである」。「命じ、且つ遵う機能は社会全体の中で決定的なもの」である²⁷⁾。彼によれば、「本質的な和合とは、したがって、誰が命ずべきかについての確固たる共通の信頼を意味する」のである。「信頼」とは、「私達が精神的に固守しようとする理念(アイデア)でも、たとえば『科学的真理』のような私達を説き伏せる理念(アイデア)でもない。「何かを信ずる」とは、「それが私達にとり真実そのものだ」ということであり、「私達が問題にして議論する気にも、また厳密に語るならば、支持する気にもならないような何かしら」であり、「信頼とはむしろ私

達を支持するもの」なのである。なぜなら信頼は「その中で『私達が行動し、生き、且つ存する』純粹の真実」と私達には見えるからである。「信頼」は、「単なる意見とか理念(アイデア)や理論ではない」という正にそのゆえを以て、「尋常なら己が一存で信ずるのではなく、ほかの人達と一緒に、つまり共同で信ずる」「一つの集団的事実」であり、「私達の社会環境の中に定着したものとして、『総体的効力』というかたちでもってはたらく」のであり、「何等の個人、あるいは特定の集団によって擁護され支持されるを要しないもの」なのである²⁸⁾。

したがって、「実体的な和合こそは安定したあらゆる社会の最後の基底で、それは何人が命ずべきかについて、その社会全体に、問題にすべくもない、また実際に問題にしたこともなかった確乎たる共通の信頼がある」ことを前提している。もちろん「信頼は最初理念」であったが、「たくさんの人々に徐々に吸収される」にいたって、「この理念は理念としての性格を喪失し、『問題にすべくもない真実』としてゆるがぬもの」となったのである²⁹⁾。

「人間を自動的に、且つ人間自身の裡から規律づけ限界づけるこの真実という唯一のものが、信頼の雲散霧消によって影もかたちもなくなる」とき、「社会の圏内にとどまるのは、ひとり諸々の欲情のみ」である。「信仰の空隙は熱情というガスを以て充填され」、「この熱情は魂に天翔けるかのごとき錯覚をもたら」し、「めいめいが己れの利害や気まぐれや知的偏執の命ずるまをふれてあるく」。「心の底の空虚から遁れる」ために、また「自分は支えられているのだと思う」ために、「何でもいから大道を闊歩してゆく旗の下に馳せ参ずる」。「社会が引き裂かれたとき、その社会に残るのは諸々の党派」でしかないから

である。このような時代に「誰もかもがたずねあうのは、『この党派に属するのか、それともあの党派に属するのか』ということ」であり、「信頼し合った時代におこることとは恰度（ちょうど）逆」なのである。

キケロは「ローマの政治的予備軍たる諸階級がすでにして制度も神々も信じなくなっていたこと」を實によく知っていた。というのは、「自身、神官（ポンティフェックス）であったそのかれもまた信じてはいなかった」からである³⁰⁾。かくして、ローマは「誰が命ずべきか」についての根本的な和合を喪失し、集団的真実への信頼・信仰も消失した結果、個々人の欲望が横溢する社会となったのである。

（４）自由の喪失

さらにキケロは「自由」についてもその消失を嘆いている。すなわち「キケローは、ローマの和合が断末魔の苦しみに悶えていることに気づいていたばかり」ではなく、「自由の潰え去ったことをもまた感じとっていた」のである³¹⁾。

ところでオルテガによれば、古代ローマにおけるキケロの言う「自由」と近代ヨーロッパの自由主義が普及した「自由」とではその意味するところが大きく相違している。すなわち、「ヨーロッパの自由」は、「公権に限界を設け、個人の人格の領域にまでそれが全面的に侵入するのを阻止しようとして執拗に喰い下がる」。これに対して、「ローマの自由」は「人間個人が命ずるのでなく、市民により共同してつくられた法こそが命ずるのだということを確認にしようと、そのことにもっと熱中している」。「この最後のもの」こそは、「キケローにとりローマの伝統的な共和制が代表してきたものであって、そういう制度の中で生きることを自由（libertas）と名づけてきた」わけである³²⁾。キケロにとっては、また誰で

もほかのローマ人にとってと同様、「自由なる用語は、政治に関わり、そのもつ最初の意味というのは、頗る明確であるにはあるが、しかし専ら消極的なもの」で、「王者なき公生活」という意味であった³³⁾。これは「不可抗的に積極的な反面」すなわち、「ローマの共和的・伝統的制度に則った公生活」という意味も有していた³⁴⁾。こうした「自由」が紀元前1世紀あたりから消滅してしまった、とキケロは嘆いていたのである。

ではこの古代の「自由」はローマの歴史においていかに展開してきたのか。オルテガはローマ人の生が、「王政からユーリウス・カエサルまで」の4～5世紀が紀元前1世紀を境に「ユーリウス・カエサルから帝政の終わりまで」の4～5世紀に移行する間に、「自由としての生」から「適応としての生」に変容してきたと主張している³⁵⁾。ここで言う「自由としての生」とは、「或るいくつかの民族」が「或る時期々々において」、国家による「強制に己れの選びとった制度的なかたちを与え—国家を己れの命がけの好みに適応させ、己れの意志がこの好みに持ちこんだ雛型を国家に押しつけ」るような生を意味する。これに対して「適応としての生」とは、「己が寸法（サイズ）に合わせ、自分でも承認して打ち出した制度の河床で心ゆくまで人間生活の流れに身をまかせるのには程遠く、またその努力も情熱的で且つ結局はいつも嬉々として国家の手強（ごわ）さを—それがいわゆる『理想』であろうと、またいわゆる『便宜』であろうと—己れの好みに適応させようとするのには程遠く、全くあべこべに、国家の鑄型、何人（なんびと）の責任でもなく、何人（なんびと）が選びとったわけでもなく、まるで地震のように、どうしようもなくやって来た国家の鉄の鑄型への各個人の存在の純粋な適応に変わってしまう」ような生を意味する³⁶⁾。そ

してオルテガは、ローマ盛衰を解明・説明するためにこれら両概念を自明の道理、すなわち「公理」として呈示するのである。

さて、ローマ人は「王達の放逐を以て」、「大っぴらにその自由としての生に踏み出す」。キケロは「伝説にしたがって、共和革命を王達の陥った権利の濫用によって説明している」が、オルテガからすれば、あらゆる革命は「暴動と異なり」、「すべて革命の構成要素」は「慣用に逆らってつくられたもの」であって、「濫用に逆らってつくられたもの」ではないのである。「人が気楽に生きてきた古い慣用が或る日どうにも我慢のならないものと見えはじめてくる」時期が到来するのである。「公共の必要として」、「王様の必要なしということが感じられる」ようになる。「王制へこの不寛容」は「原因や発端でなく、前以て心の中で始まっていた動きに付随したもの、その結果」であった。「政務官はもの言う法なり、してまた法は黙せる政務官なり」という「観念」が「『理想』に転化し、諸々の意志の上に抑えがたい吸引力を及ぼしはじめ」るのである³⁷⁾。その結果、「王達の存在が堪えがたいものと見えてくる」。「これこそは自由としての生の時期々々において一革命的であれ漸進的であれ一あらゆる政治的変革のからくり」なのである。「すべてはそういう時期時期において自由に、ということとはつまり、ひとりでに、深い靈感の底から湧き出すようにして産み出されてくる」のである。この時期の「政治的需要」は「絶対不可避の性格を以て姿をあらわしている」のである。「正（まさ）しく解決がないから、魂が空（そら）頼みして承認を与えるだけの真正の解決がないから」、「それは厳密には応急手当、ほかに処置がないゆえに私達の採用するとりつくり」でしかないのである。それゆえ「ローマ帝国」は、オルテガに言わせれば、

「一空間的にも時間的にも一処置なしな処置の最もすさまじくて途方もない例証」なのである。以上の「王達の放逐から紀元前五〇年にいたるまで」の「ローマ史において」は、次の3つの要素が競合する「公共の生活」が「ただの一日も過（あやま）つことなく、一貫」し、「自由の赫々たる有様を呈」していた。それは（1）「集団内部の実生活に、たとえば無政府状態がそうであるかもしれないような、絶対に不可避だという性格の諸問題が現われて来ないこと」、（2）「政治的諸変革において、解決が、少なくともその総体的な靈感においては、問題に先立って在り、問題の設定に寄与している、或いは別の言葉で言えば、真の『公共生活の諸理想』が心にはたらかかけているということ」、（3）「社会の成員悉くが、程度の差こそあれ、命ずる機能の協力者で、それゆえ国家の中で現に或る役割をもっている」と自（みずか）らを感じていること」、である³⁸⁾。かくしてオルテガの見たところ、「ローマの政治史」、すなわち「七つの丘というお粗末この上もない僻村から、カエサルが築き上げる大理石づくりの帝国主都にいたるまでその成長と弾みのついた膨脹のその歴史」は、「余りにも完璧に近い上昇のリズムなるがゆえに、歴史上のことがらではなく、むしろ音楽のそれかと見まがうばかり」であった³⁹⁾。

さて王達の追放後でも、「国家、公権乃至命令権」（「この三つは同義語」）は「王政時代にもっていたのと同じ簡単な構造を維持」したが、それは「古来の諸氏族（ゲンテス）の長たる元老達の協議会と、選挙によって指名される政務官とに変わる」こととなり、「政務官は行政の職務に任」じ、すなわち「法を遂行し、且つ軍隊を指揮した」のである。この「政務官職の原初の名は恐らくは法務官（プラエトル）なる名」であった。「か

くも単純なる国家の姿」も「胚胎期の民族にはこれで十分だった」のである。しかしながら「ローマの社会全体は、その成員の数を増し、その内部で諸々の社会集団や階級に分化して行く。「古い諸家族」は「世代から世代へと、門地・富・老練という三重の宝を積み上げてゆき」、これが「貴族政の形成を可能ならしめた」のであった。「貴族達のまわり」には、『名もなき市民』（プレーベース）、つまり平民がいる」のであって、その語根は「大衆というものの原（もと）の意味」をうかがわしめる。「平民は極めてすばやく極めて多人数になるもの」であり、「その量において初めてその社会的な成長力は根づく」のである⁴⁰⁾。

こうした「ローマの社会のこの増大してゆく錯雑」に対して、ローマ国家は「一歩一歩、権力を多様化する新しい諸制度を創り上げ」て、「相互に関連する諸権力乃至は諸権限〔potestades〕の複合をそこから作り出し」ながら対応していく。「これら制度の一つ一つ」は「環境が要求したところ」であって、こうした「解決」は「それがあまりにもぴったり出て来て、あまりにのびのびと機能しはじめ、またあまりにも自然に予め設けられていた法機構に合体する」ので、「国家は、恰度皮膚が私達の肉体の上にかたちづくられてゆくように、社会という肉体の型にはまってゆく」のである。これは「私達が皮膚の内において自由と感じ」、「はては『何かしら己が皮膚の内にあるごとき』状態が自由の最大の象徴」であるようなものである。オルテガはここで、「純然たる公理において『自由としての生』と名づけられるものは今やもっと具象的にこれを『皮膚としての国家』と名づけ」得ると主張している。反対に、ローマ帝国完成後の時代における、『『適応としての生』の諸時期においては」、「国家を私達の皮膚のよ

うに感ずることをやめて」しまって、それを「整形手術の器械のように感ずる」ことになってしまうと指摘するのである⁴¹⁾。かくして、このローマ帝国は「五世紀間—したがってローマ共和政と同じだけ—持続した」が、「ローマ人が帝国になじんだとは、どうも言えないままにであった」。ローマ人は「今日この帝国が、明日には公的な権力機関たらんとしている」ことを知らぬがままに、「たえまない驚天動地のうちにこの帝国を生きた」のであった。「帝国になじんだのは、むしろ服属の爾余諸民族なのであり、遂には—やがて瞥見いたすように—その永遠性—永遠の都ローマ (Roma Aeterna) —を信ずるまでになって、十六世紀にいたるまで、帝国の現実、乃至は少くとも帝国の理想をば片隅に押しやる決意はどうしてもつきかねたのである」⁴²⁾。

Ⅲ 正統性の消滅

以上のごとくオルテガは、奴隷制の消滅、ローマと属州との乖離、和合の消失、自由の喪失といった危機的状況が紀元前1世紀を頂点として4～5世紀間継続し、ついにはローマの滅亡に帰結したと考えている。さらにオルテガはローマ衰頹の原因を「非正統性」という別の観点からも洞察している。イギリスの歴史家トインビーも大著『歴史の研究』で「世界国家と称するローマ帝国」の盛衰に焦点を当てて考察し、「どのようにして、また如何なる理由によって文明は没落崩壊するかという問題」を取り上げ、その原因を彼が「精神における分裂」と呼んでいるものに帰している。オルテガの方は、トインビーが見たものと「同じ、あるいは類似した現実を『非正統性』 ilegitimidad という概念の下で」考察するのである⁴³⁾。以下、オルテガの見解にしたがって、ローマ史における正統性の変遷を

検討してみよう。オルテガは「国家（ステート）と国家元首はローマの場合、三つの異なった段階を経た」と述べている。

まず「第一の段階」では、「国家、すなわち、社会の同意を得た上での集団の公的権力の行使」は「まだ恒久的な形では存在せず、単に困難とか、危険の迫った時期にのみ一時的なものとして現われる」だけであった。そのような時には「一人の長、あるいは指導者が登場」するが、彼は「危機が克服されるやいなやただちに姿を消すもの」であった。これが「imperatorであり、それはいわばその場限りの勇者」であった。「こうした指導者」は「別になんらかの権利をもってその地位に就く」のでもなく、あるいは「正統な根拠に基づいてそうなる」のでもなかった。なぜならば、「まだ権利も正統性も存在しなかったから」である。つまり、「国家元首には当時はだれでもなれた」のである⁴⁴⁾。

「第二の段階」に入ると、「国家機能は安定したものとなり、それゆえ、この段階ではすでに国家という名称をもってそれを呼び、「国家というものについて語る価値が出」てくる。「その長は王 rex」であり、「王となる者にはさまざまな儀式を有効なものとする不思議な力が与えられ」ており、他方、「人びとはそうした儀式が神々の怒りをそらし、あるいはその加護を確実なものとしてくれる以上はそれなくしては生きていけなかった」。というのは、「キリスト教の神も含めてすべての神々は常に二面性をそなえて」いるからである。その一つは、「神はその力と怒りゆえに人間に恐れを抱かせる存在」であり、「厳密な意味においてそれは人間を震撼とさせずに」おこななかった。それは「恐怖の玄義」であった。もう一つの面はこれとは逆に、「無限の魅惑、好意、歓喜、魅了に満ちたもの」で、それは「魅了の玄義」である。このように、

「神の概念そのものにすでに敵意と好意、不利と有利という二元的性格が必ず付随して」いるのである。

「ローマ人」は「世界と、人間の生に関する一つのイメージとを一様に信仰」しており、それは「彼らの全員に共通した、いわば集団的な信仰」であった。そして、それによれば、「あるいくつかの家系の血のなかに儀式を有効なものとなすあの不思議な力を持つ神の恩寵が宿り」、そして、それは「永久に伝えられるもの」であった。それゆえ、なによりもまず「大祭司 rex sacrorum であり、神への犠牲をつかさどる者である王」は、「一つの明確な権利と正統な根拠とをもって国家の長の位に就く者」であった。そして、「この正統な根拠は神から由来するもの」であり、したがって、「王は神の恩寵によって王となった者」であった。「この最初の正統性こそ純粹で、その内容も完全に満たされた模範的な唯一のもの」であった。「王はこの正統性の上に立って imperium を行使」したが、同時に「自分のそばに常に元老院を従えて」いた。「この元老院は imperium の一部を成すもの」であり、「昔の部族長、つまり、最も古い伝統を誇り、人びとの尊敬を集め、また実力をそなえた氏族の patres と呼ばれた長たちから構成される諮問機関」であった⁴⁵⁾。

「第三の段階」に至ると、「ローマ人はきわめて具体的、かつ危機をはらんだ周囲の状況のためにどうしても王制を廃さざるを得なくなる。しかし、それだからといって、「彼らは王制の持つ最初にして、かつ最も純粹な正統性までも廃するようなこと」はしなかった。「そればかりか、ローマ人は王制のできるだけの要素はこれを保持しようと努め」た。こうして「王権は氏族長たちの権威 [auctoritas patrum]、つまり、元老院の権威のなかにそれ以後も生き続けること」に

なったのである。そして、「この元老院は王制廃止後もローマ人の imperium を行使する真の機関」であり続けた。「やがて時代の推移とともに」、「別の新しいローマが元老院が代表するこの伝統的なローマと肩を並べるように」なる。しかし、「この点を除けば、元老院の威勢は共和制の最初の幾世紀間はかつてないほど強いもの」であった。あの「いにしえのローマは、その真偽のほどは別として、一人の祖先の血を継ぐ人びとによって構成」されており、「その祖先というのは、あの昔の氏族の長」であった。「彼らは血族集団」であり、そして、「人びとの記憶も及ばぬような遠く、神聖な過去に源を持つローマそのもの」であった。これに対して、「新しいローマはまったく異質のもの」であった。そこでは、「市民の大多数は新しい人間」であって、「彼らはかつての氏族のどれともなんらのつながりも血縁関係もない人びと」であった。それは「単に各個人が自分だけでそこにいるといった人びと」であった⁴⁶⁾。

こうして、「元老院をその骨格として成立していた昔日のローマ」に代わって、いまや「大衆を成す平民の手による新しいローマが誕生」した。これは同時に「人口の増加、軍事征服、農業、商業、産業など各方面の交易量の増大などによる全体的発展から必然的に生じてくるかすかすの新しい要請」に応える「ローマの第一次富裕化」、「過剰なまでに豊かな可能性」を発見する「豊饒化 *riqueza* ないしは富裕化 *enriquecimiento*」の時代の到来である。こうした「富裕化」においては、「現在は伝統的な過去の前に立ちほだかり、それに対立する何か新しいもの」、「過去が持っていた生のあらゆる集積を何か途方もなく劣ったものとして遠ざける性格を持つ」つことになる。ローマ人は「自分たちがいまや新しい様式、したがって、*modernus*〔今様〕の在り

方、新たな存在形態のなかに足を踏み入れたことを自覚」したのである⁴⁷⁾。そして、この「今様性」は「すべてそれだけですでに非正統性と非聖化の始まり」であり、「まさに芽ばえかけた非正統性、確固とした秘蹟に基づかない生」であって、「たちまちにして正統な伝統性の上に勝利をおさめることは必至のこと」であったのである⁴⁸⁾。かくしてローマは「第二ポエニ戦役までは自らのなかに埋没した生」を営んでいたのに対して、「西紀前一六八年にマケドニア王ペルセウスを敗り、ギリシアを征服するとともに、どうしても一つの開かれた生、それも自らとは異質なものに開かれた生」に入っていかにざるを得なくなるのである⁴⁹⁾。つまり、ローマは「その埋没し、確固たる成聖に基づく生」から、今度は「開かれた生」へと移行するのである。そして「この開かれた生の終局と結果がローマ帝国」なのである⁵⁰⁾。オルテガは人間は「生全体の過剰な富裕化」から信念の歴史的な喪失を経験し、他民族との通商・接触を通じて孤立から脱し、一層充実した効果的で聖別されていない「生の諸可能性」を知るようになると言っている⁵¹⁾。

かくして、「西紀前一九〇年から九〇年に至る一世紀間」に、「ローマ人の生そのものであった緊密な中枢部全体が分解して果てる。「信仰が分裂し、慣習、つまり、人びとの行動基準の体系が解体」すると、その直後に「国家権力の正統性の崩壊」が続いた。「もはや元老院は人びとから信頼されず、尊敬もされなく」なった。それは「第一に、墮落の先端を行くのが当の元老院議員の一族」であり、「元老院の尊敬すべき権威に対して反乱および革命を起した最初の人間たちは彼ら元老院議員一族のなかでも特に秀でた人びとであったから」である。「エキテス〔騎士〕の反乱、平民の反乱、スパルタク스에率いら

れた奴隷の反乱、盟友の反乱というようにあらゆる反乱が続発」した。しかし、このような反乱の底には、「巨大な福祉繁栄が可能であり、すべての人間がそれに参与し得るとの確信が脈々と流れていた」のである⁵²⁾。

以上のごとく、ローマ人は「自らの文明が最高頂を迎え、その発展も成年期に達し、その覇権が最大のものとなった時代に到達する」と同時に、「非正統性の支配する原始状態」に戻ってしまったのである。今や、「ローマ人の集団社会は共通精神の場を失ってしまった」ために、そこには「正統性の場も存在」しなくなった。そこには「号令する権利をそなえた者はだれ一人存在」せず、そのために「人びとは号令権を握るべくお互いに戦」ったのである。「激しい内戦の後にローマ人がたどり着いた事態」は、「どうしてすべての人びとが権力を最終的にアウグストゥスに譲り、その結果、プリンキパトゥス〔元首政〕、つまり、帝国が成立したのか、その理由を説明しようとする時」の「タキトゥス一流のきわめて簡潔な一つの言葉」、「*cuncta fessa*」のなかに表明されている。つまり、「人間も物事もすべていっさいが疲れ、うんざりしており、もうこれ以上はたくさんだという状態」に立ち至ったということである⁵³⁾。

「疲労」、「これこそ皇帝アウグストゥスが自らの権力行使の基礎として用いた名目」であり、「それは正統ではないが、効力を伴った名目であり、緊急事態の所産」であった。すなわち、「たとえどのような人間であっていいから、だれかが国家権力の行使、つまり、号令を発し、無政府状態に終止符を打つ必要」があったのである。かつて「政治に過度なまでに挺身し、その専念ぶりはあたかも政治に憑かれたかのような」ローマ人が、「三〇年ころになると、今度はその反動として、いっさいの政治というものに対する満

腹感と嫌悪感が激しい潮流となって生じてきたのである。それは「だれ彼を問わず、とにかく政治のある人間の前に放り出してしまふことによって、自分は政治のために心をわずらわせずに済ませたいという欲求」であった。こうして、ローマは「その一千年の歴史過程を歩み終える」と同時に、「自分たちの国家（ステート）の長にはどのような人間でもなり得るという状態に再度舞い戻ってしまった」のである。であるからこそ、「ローマ帝国は一度も純粋な法形態というもの、つまり、真の合法性も、正統性も経験しなかった」のであり、「ローマ帝国の本質は治政の形態なき形態、真の制度を有さない国家形態」であったということである。「疲労困憊したローマ中〔*cuncta fessa*〕が正統性を必要」としていたにもかかわらず、「正統性をそなえていないがゆえに、ローマは正常な国家でもなく、またそうあり得るはずもなく」、さらに「正統性を必要としていたにもかかわらず、だれ一人それを望む者はおらず、アウグストゥスでさえその例外」ではなかった。事態はすなわち、西暦「二二年」、「ついに元老院がアウグストゥスをディクタトル *dictator* またはケンソル *ensor* に任命する決定を下すまでに悪化」した⁵⁴⁾。しかし、「アウグストゥス」は、「どちらかといえば小心で猜疑心の強い男であったため、最高権力の行使の責任者とされるかもしれぬという可能性を目前にして恐れを抱き、そのためシチリアに逃れ」る。つまり、「アウグストゥスはこの時、自ら独裁者の地位、皇帝の地位から逃げ出した」のである。すると、「元老院議員の一部は急遽アウグストゥスの後を追い、彼に追いつがるや、どうしてもローマに帰還し、ディクタトル、プリンケプス、インペラートルとなるよう強要」したのである。こうした「アウグストゥスの登場によって発足した皇帝国

家（ステート）」はやがて「ローマがそれまでに一度も体験したことのないような最高の形で号令権 imperium の行使を実行に移す」。すなわち、それは「成聖を抜きにした純粋な形で国家権力が圧縮されたもの」であった⁵⁵⁾。

以上のごとくオルテガは、ローマ国家に関してその「国家権力の萌芽からそれが燃え尽きるまでの発展を概略的に」辿ったあと、「ローマ史」は「他に類のないもの」であり、「思わず驚異の感を抱かずにはいられないと同時に、われわれにこの上なく深い洞察力を与えてくれる何ものか」を発見させると言う。すなわち、彼は「国家権力の行使にはかならない国家（ステート）は非正統性のうちに始まり、非正統性のうちに終わるということ」、また「一民族が極端な成熟の段階に達すると、そこには期せずしてかつて未開状態下の国家的機能がそなえていた特徴がことごとく再現するということ」を見出すのである。オルテガによれば、「国家的機能のなかで残る唯一のものはそこにある緊急事態用の外科技術、つまり、危険にさらされたおりの社会的反動の要素」であり、それによって「国家機能を預かる者、あるいはその発動者たる元首は別になんらかの権利によってその地位に就くのではなく、社会の全員が国家機能を必要としながらもだれ一人としてそれを果たそうとしないがために、どのような人間でも元首の座に就くことができる」というのである。ここに、「国家の真の姿、国家の本質そのものの中核を成しているもの」として、「国家は正統性に基づく存在ではなく、正統性とは幸運によってもたらされる一種の添加物であり、徳である」ということが明らかになったとオルテガは言うのである⁵⁶⁾。

Ⅳ 真の正統性 —鳥占と元老院—

さてオルテガによれば、キケロはその著『国家について』のなかで、「誰よりも名高いローマ人たるスキープイオー・アエミリアヌスの霊」と「スキープイオー・アフリカーヌスの更に古りにし霊」を呼び出し、「歴史の中で永遠に言葉の最高の意味において都たらんとしているこのローマに勝利をもたらした諸制度のその至高なる構築」を語らせ、「ローマの国制をつくり上げて行った曲折」を明らかにしていく。そしてキケロはローマ構築に「決定的だったのはロムルスの第一着手」であり、「ラティウムラティウムの狼の児の伝説的な姿において」「ローマ究極の本質を特徴づける」のである。キケロによれば、「かの偉大なる民族が生きてきたこの本質」とは、「われらが国家の最高の二個の根抵、鳥占と元老院 *los auspicios y el Senado* の創設」なのである。このときオルテガは「ただそれだけのことであり、またこの順序にしたがってである」と、鳥占が順序第一であることに注意を喚起している。他方の「元老院」は「ローマ史の中心をなす制度」であって、「キケローがその真只中で筆を執っている大内乱にいたるまでは、嘗てローマで疑いをさしはさまれたためしなかったもの」であった。けれども「私達をおどろかせる」のは、「鳥占が元老院よりも何か更に大事なものとして私達に明示されているということ」、また「このようにして何かこうローマ史の胎内にある臓腑のようなものを意味するにいたるということ」である⁵⁷⁾。

宗教的懐疑主義者であるわれわれ現代人には、「ローマの政務官（マギストラートス）ともあろう者が、文武いずれにてもあれ、いかなる行動を起こすにも先立ち、鳥占におうかがいを立てなくてはなら」ず、それこそ「大

真面目で、鳥共の飛び具合、その食欲やその不首尾、また鳴きっぷりにあらわれる機嫌のよしあしを観察するのに、かまけきっていた」というのは笑止と見える。しかしオルテガの洞察するところ、「私達の軽蔑はこの場合、私達の馬鹿さ加減の一形式」にしか過ぎないのである。なぜなら「儀式を成り立たせるその営みの最高級の素朴さは、その靈感の何たるか」を却ってずっとよく明らかにするからである。「鳥占にうかがう」とき、「人は自分がひとりではないということ」、「自分の周りに、何処だかは知らないが、自分より力があって、自分が縋らなくてはならない諸々の絶対的な真実在が在るのだ」ということを認識している。「神意が鳥の飛び具合や考え深い者の熟慮の中にどんな意中を打ち明けるかは二次的な問題」である。肝腎なのは、「人が己れを超えたものに縋ること」なのである。「この行為は、軽はずみに生きる」のでなく、「心して一超越的な真実在に心して一振舞うように私達を導いてゆくもの」であって、これこそは「ローマ人にとり宗教 (religio) という言葉のもった厳密な意味」、また本当のところ、「一切の宗教の本質的な意味」であるのである。

オルテガによれば、「人が何ものかを信ずるとき、その何ものかが人にとり疑問の余地もなく真実在であるときに、そこから宗教が出来上がる」。「宗教的」(religiosus)とは「心を配った」という意味であり、「軽率にではなく用心ぶかく振舞う」ということなのである。「宗教 (religi6n) の反対」は、「なおざりであり、無頓着であり、我関せずであり、投げやり」である。「われ集中しなおす (re-lego)」対 (むか) いあって、「われ集中せず (nec-lego)」がある。「篤信 (religente, religiosus)」が「なおざり (negligente)」と対立するのである。オルテガの見るところ、

「鳥占」は「キケローにとっては宇宙についての確乎たる共通の信頼を象徴するもの」であり、これこそ「かの国家の一番の土台」であった。「国家と鳥占とその間にかくも繋がりがあった」がゆえに、「鳥占は『権力』、すなわち『命令権』(imperium)を意味する」ようになり、「誰かの鳥占の下に立つということは、その命令に服する」に等しかったのである⁵⁸⁾。

以上からしてオルテガの言わんとすることは、「元老院」よりも何よりも、「鳥占」、つまり「人が己れを超えたものに縋ること」、「心して一超越的な真実在に心して一振舞うように私達を導いてゆく」こと、「宗教」、「軽率にではなく用心ぶかく振舞う」こと、「われ集中しなおす」こと、すなわち「篤信」こそが「幾百年に亘り偉大なるローマの調和を可能にした」のであり、それゆえ、「鳥占」、「宗教」こそが国家の真の正統性を代表するものであったのである。かくして、「信頼の概念と国家の概念とが貫き合」い、それゆえ、「政治において宗教の時代となおざりの時代、気を配る時代と無頓着な時代、周到な時代と軽薄な時代」が存在するのである。では、ローマの政治・歴史に起こったごとき、「命ずる際に、よって以て立つべきその確乎たる共通の信頼が欠如したとき」、「いったい何が起こっただろうか」。オルテガによれば、そのとき「社会は自動的命機能求めて、瀝乎 (れっき) とした制度を拒み、一つの便法に訴えた」のである。それが、キケローが上記の書物で披露した「腹案」であり、そのキケローを殺した「アウグストゥス为实现しようとしているもの」、すなわち「ローマ帝国——一つの便法、それももっともすぐれた便法」であったのである⁵⁹⁾。そしてこの便法が有効性を失ったときローマ帝国も消滅し、その後キリスト教によるヨーロッパ中世社会が形成さ

れ始めるのである。

V おわりに

名著『大衆の反逆』でヨーロッパ社会の大衆社会状況を的確に叙述したオルテガは、その進むべき方向として「ヨーロッパの統合」を提唱した。EU形成のここ半世紀の歴史過程を觀れば、それは確かに的を得た提言であったであろう。オルテガの生きた時代からすれば、ヨーロッパ統合を提言することがその後の歴史を見ても、正解であったことは理解できる。しかしイギリスのEU離脱など「ヨーロッパの分裂」が予想される昨今の状況においては、大衆社会の救済のためにはいかなる方途が提示され得るのであるのか？すべての正統性が崩壊し真に信ずることができるものが消滅したとき、何が歴史に現れるのであるのか？ここでもオルテガが達成した「歴史的理性」は有効であろうか。彼は『世界史の一解釈』において神に承認されてこそ真の正統性が確立されると明言し、また「ローマ帝国をめぐって」ではローマの政治家キケロの見解を紹介して「鳥占と元老院」、それも順序として第一に書かれた「鳥占」、すなわち宗教こそが最重要のものであったと指摘しているのである。つまり、オルテガは特に言及していないが、ローマ帝国衰退期におけるキリスト教の出現という史実を直視すれば、一切の正統性が消滅したとき、その社会に立ち現れてくるのは新たな「神」、新たな正統性であると、彼は示唆しているのではなからうか。その意味でオルテガの到達した「歴史的理性」は正しくなおも有効であったと言えよう。

<註・引用>

(1) Ortega y Gasset, J.: España invertibrada

(1921), Obras Completas, Tomo III, 51, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 桑名一博訳、無脊椎のスペイン、256、白水社、1969

(2) 南川高志：新・ローマ帝国衰亡史、1、岩波書店、2013

(3) 後藤篤子：「ローマ没落史観」、CD・ROM世界大百科事典、第2版3刷、日立システムアンドサービス、1998-2002* 古代ローマ衰亡の原因については、後藤篤子氏は、古代～中世～近世の没落論を挙げたあと、現代における没落論に関して内因論と外因論に区分して紹介している。内因論者のうち政治的・宗教的・人種的な諸原因を主張するのは、『ローマ人盛衰原因論』で「軍隊の力の増大と、元老院と衆愚に墮した人民の力の逆転に没落の主因を求めた」モンテスキュー、「2世紀末における元老院の権威失墜を重視する」フェレロ、「アウグストゥスの軍隊縮小政策を没落の主因とする」コルネマン、「代議政体の欠如による統治者の孤立化と大衆の政治離れを重視する」ヘイトランド、「最良者の絶滅」を主張するゼーク、「人種混交によるローマ市民団の劣性化を説く」フランクヤニルソン、ギボンの言う宗教的要因を「キリスト教会への最良者の吸収」として再評価したモミリアーノ、「人口減少による人力不足を主因」としたボーク、などである。また内因論者のうち社会構造的側面を重視するのは、「ローマの繁栄を<古代資本主義>とみてその形成条件の消失に没落原因を求め」M. ウェーバー、「コロヌス制(コロナトゥス)の成立に古代の終焉をみる」ウェスターマン、「3世紀の危機を都市ブルジョアジーと農民大衆の対立としてとらえて経済的没落原因論を拒否した」が、彼の『ローマ帝国社会経済史』では「市場の外延的拡

- 大に伴う属州の生産地化とイタリアの経済的下降が、帝国の社会経済的構造を崩壊させた」とするロストフツェフ、「国内市場の狭隘と奴隷制という古代経済の構造自体に古典古代都市国家没落の基因」をみたウォールバンクなどである。外因論者としては、「対外危機が国内危機を惹起するとして3世紀にユーラシア大陸規模で展開された国際関係にローマ帝国変質の契機をみる」アルトハイム、「ローマ文明は天寿をまっとうしたのではなく<暗殺>された」とするピガニョール、「増大するゲルマンの外圧に没落の主因をみる」ジョーンズなどを挙げている。そのほかにも『西洋の没落』を唱えたシュペングラー、大著『歴史の研究』で文明形態論的没落史観を打ち出したトインビーに注目し、さらに「ゲルマンによる古代文明の破壊と中世暗黒時代の導入」という「文化没落説」を批判して「文化連続説」を主張したA. ドープシュ、「アラブの進出まで古代地中海世界の統一は保持された」とするピレンヌなどを挙げ、「今日では単純な文化没落論は姿を消し、ローマ没落の問題を価値判断を含む<没落>という観点からではなく、古代世界の変容、古代から中世への漸次的移行として考える傾向が強く、内因論の焦点も元首政から専制君主政への移行期である3世紀の危機の構造的解明に当てられている」と述べている。*なおローマ帝国衰退に関するオルテガの見解についての網羅的研究は現時点では、見当たらない。
- (4) 本村凌二：はじめて読む人のローマ史 1200年、292-307、祥伝社、2014
- (5) 秀村欣二：「ギボン」、CD・ROM 世界大百科事典（前掲書）
- (6) ギボン：朱牟田夏雄訳、ローマ帝国衰亡史、VI、187-188、筑摩書房、1988 *

- 『ローマ帝国衰亡史』 I～XI（中野好夫訳 I～IV、朱牟田夏雄訳 V～VI、中野好之訳 VII～XI）、筑摩書房、1988
- (7) 後藤篤子、前掲項目
- (8) ギボン、前掲訳書、188、189
- (9) ウォールバンク：吉村忠典訳、ローマ帝国衰亡史、178、179、岩波書店、1963
- (10) 同上訳書、183
- (11) 色摩力夫：オルテガ—現代文明論の先駆者一、62、中央公論社、1988 Rikiwo Shikama: ORTEGA, Filósofo de las crisis históricas, 39ss, Pontificia Universidad Católica de Chile, 1991 *色摩氏によれば、「紀元前一世紀の状況は、一言で言えば、『絶望』であった」。「紀元前一世紀には、地中海世界の至るところで、現行の信念の体系が破綻していた。ギリシャ人が『理性』に、ローマ人が『国家』に、ヘブライ人が『律法』に依存して、安心して生きる訳にはいかななくなっていた。民衆に至るまで深刻な不安を感じていた」。(同上書、62-63) *長谷川高生：大衆社会のゆくえ—オルテガ政治哲学：現代社会批判の視座一、ミネルヴァ書房、1996の「第六章 歴史的危機における人間」を参照のこと。
- (12) Ortega y Gasset, J.: Sobre la muerte de Roma (1926), Obras Completas, Tomo II, 538-539, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 西澤龍生訳、ローマの死滅について、傍観者<エル・エスペクタドール>、238-239、筑摩書房、1973
- (13) Ibid., 539-540; 同上訳書、239-240
- (14) Ibid., 544; 同上訳書、246-247
- (15) Ibid., 543; 同上訳書、244
- (16) Ibid., 543-544; 同上訳書、244-245
- (17) Ibid., 544-545; 同上訳書、245-246
- (18) Ibid., 545-546; 同上訳書、246-247
- (19) Ibid., 546; 同上訳書、247

- (20) Ibid, 546; 同上訳書、247-248
- (21) ibid., 547; 同上訳書、249
- (22) Ortega y Gasset, J.: Del Imperio Romano (1940), Obras Completas, Tomo VI, 54, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 西澤龍生訳、ローマ帝国をめぐる、反文明的考察、92-93、東海大学出版会、1978
*オルテガはキケロの『国家論』(Sobre el Estado (De Re publica))を参考している。
- (23) Ibid., 57-58; 同上訳書、98*ポリュビオスはその『歴史』第六巻で、「ローマ人」は「祖国の国制の完成を、分別の結果ではなく、夥しい闘争の間に、事件々々の処理の裡に、有為転変の明らかな直観からこよなき助言をひき出しつつ、かち得たのである」と述べ、「理性と転変または浮沈というこのすさまじい二つの歴史的潜勢力を対決に委ね、相互にそれぞれ語らしめ」たのであった。そしてキケロはポリュビオスから「概念に発し、概念を通して動き、概念におわる」純粹理性と、他方「転変そのものとの私達の出会いに発し、事物の本性から突発的に湧き出してくる」歴史的理性という「理性の二つの形式」を具現した歴史的事例を学び (Ibid., 56; 同上訳書、96)、「スキューピオーが最上のものと考えるわが国制、ほかのすべての国制 (ということはつまり王制と寡頭制と民主制) を打って一丸としたわが国制」、つまり“混合体制”の形成を見出し、「内紛」に「国家の安寧が生まれて来るその土台たる状況そのもの」を見てとるのである。(Ibid., 57-58; 同上訳書、97)
- (24) Ibid., 58, 59; 同上訳書、99、100
- (25) Ibid., 59; 同上訳書、100
- (26) Ibid., 58; 同上訳書、99
- (27) Ortega y Gasset, J.: La rebelión de las masas (1930), Obras Completas, Tomo IV, 242, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 桑名一博訳、大衆の反逆、オルテガ著作集2、196、白水社、1969
- (28) Ortega y Gasset, J.: op. cit., 60-61; 前掲訳書 (ローマ帝国をめぐる)、103-104
- (29) Ibid., 61; 同上訳書、105
- (30) Ibid., 62-63; 同上訳書、107
- (31) Ibid., 69; 同上訳書、112
- (32) Ibid., 85; 同上訳書、130-131
- (33) Ibid., 77; 同上訳書、122
- (34) Ibid., 78; 同上訳書、125
- (35) Ibid., 99; 同上訳書、137
- (36) Ibid., 89; 同上訳書、135-136
- (37) Ibid., 90-91; 同上訳書、138-139
- (38) Ibid., 91-92; 同上訳書、140-141*オルテガによれば、「ローマの諸制度」は「形式的抽象的な理性から靈感をうけたというもの」ではなく、「国民が魂をもつその一方で魂は国民によりつくり上げられるものなのだという確乎たる信念の底から、その環境の中において靈感をうけたもの」であり、その「好例」は「護民官」制度である。(Ibid., 101; 同上訳書、147)「平民が元老院と非連帯だとみずから感じた諸々の案件を政府の内において明らかならしめるのを任務とする法律的な機関」である「護民官」制度が可能であったのは、「平民のうちに、国家へのその介入とは別に、元老院そのものやローマの生活全体との有り余る連帯が機能していたから」であり、したがって、この制度は「当の制度の外や国家の外にあった何かしら」、すなわち「社会の奥深い法律外的な内奥に在る補完」により「生きてきたもの」であった。(Ibid., 106; 同上訳書、156)
- (39) Ibid., 97; 同上訳書、142
- (40) Ibid., 99; 同上訳書、143-144

- (41) Ibid., 100-101; 同上訳書、144-146
- (42) Ibid., 87-88; 同上訳書、132-133
- (43) Ortega y Gasset, J.: Una interpretación de la historia universal, En torno a Toynbee (1965), Obras Completas, Tomo IX, 102, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 小林一宏訳、世界史の一解釈、オルテガ著作集7、159, 160, 白水社、1970
Fernández, Pelayo H.: Guía del lector de ORTEGA Y GASSET, Conceptos alfabetizados, definidos y clasificados, 464-469, Editorial Circulo Rojo, 2017* フェルナンデスが簡潔にまとめたオルテガのローマ史の時期区分も参考にした。
- (44) Ibid., 125; 同上訳書、201 Llano Alonso, Fernando H.: El Estado en Ortega y Gasset, 43-46, Editorial Dykinson, 2010
- (45) Ibid., 125-126; 同上訳書、201-202 Llano Alonso, Fernando H.: op. cit., 52-54* ヨーロッパの君主制・民主主義についてオルテガは、以下のように言っている。彼は「ギリシアにしる、イタリアにしる、あるいはヨーロッパにしる、ある民族のなかに完全、かつ純粋な正統性が存在する場合」は、「それは常に君主制であった」と主張する。「このまず最初に生まれた正統性はローマの場合には時期尚早に共和制という別の正統性によってとって代わられ」るが、「それはもはや神の恩寵に基づく純粋なもの」でも、「神が絶対的な支配権を一家族、あるいは数家族に限って授けたという信仰を唯一の基盤として成り立つもの」でもなく、「法は元老院と民衆の合意から発するという信仰に基づくもの」であったと言明する。彼によれば、「この第二の正統性」は「もはやかつての王制のそれのように完全でも純粋でも」ない。「ヨーロッパでは欠陥を持ったこの第二の正統性」は「イギリスに非常に早く姿を現わし、一八〇〇年(?)には体制として成立し、一八五〇年にはあらゆるヨーロッパ諸国も同じ体制を採用に至」った。それは「立憲君主制と呼ばれるもの」であった。あるいはまた「王を排除し、代わって共和制が樹立され、国民の主権をその源とする選挙に根拠を置く正統性をそなえた者が国家元首となる体制」が採られたが、「正統性が最終的にたどり着いたこの最後の形態」は「民主主義」という言葉で呼ばれた。オルテガが主張したいことは、「ヨーロッパ文明におけると同じく、ギリシア・ローマ文明においても王制という基礎的、かつ他の模範となるような正統性が最初に存在」し、「この後に一部、あるいは全面的に民衆の主権に基づく民主主義という正統性が続いた」が、それは「あるいはまた実効を伴った正統性」であった。ところが、「その実効性はすでにそこなわれたもの、無理に造り上げられたもの、皮相なものであって、集団の心のなかに深く根を張るもの」ではなかったということである。(Ortega y Gasset, J.: op. cit., 112-113; 前掲訳書(世界史の一解釈)、178-180)
- (46) Ibid., 126; 同上訳書、202-203 Llano Alonso, Fernando H.: op. cit., 54ss
- (47) Ibid., 128, 129; 同上訳書、207, 208-209
- (48) Ibid., 130; 同上訳書、209-210
- (49) Ibid., 137; 同上訳書、224
- (50) Ibid., 142; 同上訳書、234
- (51) Graham, J.T.: Theory of History in Ortega y Gasset, The Dawn of Historical Reason, 283, University of Missouri Press, 1996 *その後、「ユリウス朝およびクラウディウス朝の時代、すなわち、帝国成立後最初の一世紀半の間」は、「属州のローマ化が急速かつ強力に進行し」、「権限の乱用

があったにもかかわらず」、一方では「属州の行政は良好に行なわれ、そこでは経済的富の増加によって、イタリア本土での窮乏没落を尻目に豊かな市民階級が成立」していった。この「新しく成立したばかりの属州市民階級」は「ストア哲学という知的『準宗教』、一『教養』とでも称し得るもの」のなかで教育され、「次の時代、つまり、フラウィウス朝、アントニヌス朝の時代」には、まさに「この属州市民階級が支配権を握る時代」となる。そして、「ローマ人の共通の信仰が崩壊し始めてから四世紀後」、ちょうどトラヤヌス、ハドリアヌス、マルクス・アウレリウスという「スペイン人皇帝」の時代に入ってから、「ストア哲学が影響を持つようになった」のである。「これら三帝は自らもまたストアの哲人」であった。「ローマ帝国の貴族と市民階級の間に限なく広まったストア哲学」は「最もすぐれた政治が行なわれ、人びとが最も甘美な幸福を味わった一時代」をローマ帝国にもたらしたのである。それゆえ、「全員に共通の生きた信仰をその前に完全に喪失してしまった一民族」が「ストア哲学のおかげで何か集団的信仰に類したようなものを獲得」し、それによって「自分たちを暫時緊密な状態に保持」し、その結果として、「波乱に富んだローマ帝国史五世紀にわたる生」のなかで、「正統性らしきものを味わった唯一の時代」がもたらされたのである。オルテガはこの点について、「非正統性のなかに構成された生の分析」として、「共和制ローマの衰退期とわれわれ自身が今こうして息をしている現代こそがともにこの非正統性の生の巨大な二例である」と注意を喚起している。(Ortega y Gasset, J.: op. cit., 151; 前掲訳書(世界史の一解釈)、250-251, 251-252)

- (52) Ibid., 152; 同上訳書、253
- (53) Ibid., 153; 同上訳書、255
- (54) Ibid., 154; 同上訳書、256-257 * 「またの名前はインペラートル imperator」である。
- (55) Ibid., 154; 同上訳書、257 * オルテガは「国家の個人の上に及ぼす圧力」につき、「信仰はいわば内面的規律であり、これが欠如すると自動的に外面的規律が強化される」と言う。
- (56) 154-155; 同上訳書、257-258
- (57) Ortega y Gasset, J.: op. cit., 63-64; 前掲訳書(ローマ帝国をめぐる)、108-109
- (58) Ibid., 64; 同上訳書、109-110
- (59) Ibid., 64-65; 同上訳書、109-111

